

氏 名

布 埜 千 加 子  
ふの ちかこ

学 位

博 士 ( 芸 術 学 )

学 位 記 号

博 ( 芸 ) 甲 第 十 六 号

学 位 授 与 年 月 日

平 成 二 十 一 年 三 月 十 四 日

学 位 授 与 の 要 件

学 位 規 程 第 三 条 第 三 項 該 当

論 文 題 目

奥 田 正 造 の 茶 道 教 育 論 — 思 想 と 実 践 —

審 査 委 員

主 査 教 授 倉 澤 行 洋

副 査 教 授 池 田 有 隣

副 査 教 授 市 川 悦 也

奥田正造の茶道教育論―思想と実践―

一、本論文の要旨

本論文は、近代の教育者である、奥田正造の茶道教育の思想と実践について考察するものである。

奥田正造（一八八四―一九五〇）は、東京成蹊高等女学校の校長として茶道を中核とした女子教育を行い、また信州を中心に各地で教育活動を精力的に行った人物として知られている。その代表的著書としての『茶味』は、千利休の侘茶の精神を汲む「心の茶」を提唱した茶道理念の結晶ともいわれ、また、茶道の精神が仏教、儒教、神道思想を背景にしていることについて、具体的且つ理論的に示したものとして大変重要である。また、戦前に文部省の要請で著述された『炉辺閑想』は、その時代における奥田の、茶道および教育に対する視座の独自性を示すものとして注目すべき書といえる。

奥田の本格的な研究は、これまでほとんど行われてこなかった。伝記的研究によって奥田の実績が紹介された例は二、三あったが、それらは単なる事跡の確認にとどまり、思想的考察までに至っていないのが現状である。その原因はいろいろ考えられるが、茶道を教育的側面からアプローチする研究者の不在などもその一因だったであろう。奥田が特定の流派に属することなく、また、個人的に茶会や茶事を催すこともなく、主に教育に特化した茶道を実践していたこと、そして、修行を強調するあまり奥田の茶道から文化性・芸術性を見出すことが困難であるという見方が、奥田正造研究を滞らせた要因とも言い得るであろう。しかしながら、実際、近代西洋の *tea ceremony* の翻訳用語である「芸術」ではなくて東洋的な「藝」という観点を踏まえることにより、これまでほとんど言及されてこなかった奥田の茶道の「芸術性」についても十分に考

察することが可能である。単なる表層的な美の追求を超えたところにある、身体の藝術性や精神を養う方向へと向かう奥田の茶道は、東洋藝術の結実点のひとつであったともいえよう。

本論文で奥田の茶道教育論が取りあげられた趣意は、以下の二点に集約される。一つ目。奥田は流派茶道の枠組みを超えて独自の茶道論を構築していた。そして、変容する教育思潮に左右されることなく茶道教育を継続していった。こうした事実から、奥田は、茶道の普遍的な核を熟知し、茶道教育の方法論を確立していたと考えられる。このような観点から、奥田の茶道教育論の考察を通して、茶道による人間陶冶の可能性を再確認し、もって混迷する今日の教育に対してよき示唆を求めたいのである。

今ひとつ。奥田は「知」よりも「行」の教育を重んじていた。人格を形成することを第一義としていた奥田の教育とは、全人教育を目指すものであった。奥田の全人教育においては、言葉や理論のみによって理解させるだけでなく、根源的な体験にふれさせることが何よりも大切であった。つまり、知識や理論を注入するだけでなく、「身体的」レベルにおける「感性」をうながす事が必要であり、その為には実践的な体験も含めた教育が行われなければならないというのが奥田の主張であった。したがって、奥田の茶道教育論を分析することによって、茶道教育において、近年重要なテーマとして浮上している、藝道の教育に共通する「身体的」的な「行」の教育の意義究明にも役立つであろうとの期待があった。

以上の観点から、本論文では、奥田正造の茶道教育論の内容を考察し、その価値を称え、また今後の茶道のあり方、日本の教育のあり方を問う基礎の学となり得るものを評価する一方、時代の制限によって生ぜざるを得なかったと思われる、奥田の茶道教育論に見える偏頗性も指摘する。

具体的には、序章と終章及び三つの章から成る本論に分けて論じる。

序章では、『茶味』『奥田正造全集』『奥田正造選集』『信濃不言会史資料』『桃李集』など、奥田正造研究に関する文献史料を紹介しながら、主に本研究の課題及び研究方法について述べる。

本論は三章からなる。第一章では、奥田の教育実践を方向づけた思想はどのように形成されていったのかという点を中心に、奥田の生い立

ちについての考察を行う。奥田は幼少の頃より父から『大学』、『中庸』、『論語』、『孝経』をはじめとする四書五経の素読に始まり、道念を養うための糧として、多くの師から念誦、念仏、禅、聖徳太子の教えなどを受けた。このような、東洋の思想である儒教・仏教を中心とした教育を受けたことについて特に注意されることは、それが言語や論理、そして概念や観念によつての理解のみに止まることを斥けようとするものであったことである。このような「行」を重要視する姿勢が、のちに彼の教育論や茶道論に極めて大きな影響を与えていた事を論じる。また、奥田の茶道教育論の背景に、利休の茶の思想を述べたとされる『南方録』の修行論が色濃く反映されていた点にも注目する。

第二章では、奥田の「教育観」について論じる。まず、東洋と西洋との「教育」の意味に関する比較分析を行う。特に、奥田が熟読していた儒教書を中心に、東洋における「教育」の理解とはなにかを述べる。東洋の教育観においては、「徳」と「教」は表裏一体である。つまり、東洋的な「教」の意味とは、知識や技能を身につけることはもちろんであるが、むしろ先賢の行いや教えを学ぶことによつて、道徳心を養うことに、より重きをおいていた。知識偏重型の近代教育の弊害を危惧していた奥田は、このような東洋的教育観を、目指すべき指針と考えていた。従つて、教育の現場とは学校のみで留まるものではなく、その基礎となるのはまず「家庭」であり、良き母親であるという家庭問題にまで深く関わっていたのである。このような奥田の「教育観」について、具体的には、胎教論、家庭教育論、女子教育論を中心に明らかにしていく。

第三章では、奥田の「茶道観」について論じる。本章では五節に分けて、まず茶道論の系譜及び奥田の茶道理念を鳥瞰した上、さらに奥田の茶道論の特色が最もよく示されている「掃除」、「茶器」、「点前」、「茶事」という具体的な茶道修行内容について考察を行う。

はじめに、茶道論の系譜について、藪内紹智『源流茶話』、井伊直弼『入門記』、玄々斎『茶道源意』、久松真一『わびの茶道』、そして倉澤行洋「一期一会 覚書」(『井伊直弼茶書 一期一会』1)、同『増補 藝道の哲学』(一九九三年 東方出版)、同『東洋と西洋』(一九九五年 東方出版)等を参考に、茶道がどのように捉えられているのかについて概観する。

次に、第一章・第二章で述べた奥田の思想形成過程をもとに、奥田が茶道教育を確立していった過程を述べる。奥田の女子教育においては、成蹊学園創始者である中村春二(一八八七—一九二四)の存在が非常に重要である。二人が東洋思想である仏教と儒教という共通の思想基盤を有していたことを明らかにすることにより、その当時の教育思潮との関連から、当時成蹊学園の教育理念がどのようなものであったかについて検討する。成蹊学園の教育理念のひとつである鍛錬教育主義は、大正自由教育に代表される西洋からの教育観がそのまま受容されていた

当時の教育界に対するアンチテーゼと考えられた。このような理念を掲げ教育に邁進していた中村は、奥田の茶道授業に触れ、「茶道こそ凝念の境地の活現であり実用である」と気づき、奥田に女学校の茶道教育を任せただのである。こうして奥田は、かつて自分自身の道念を磨く「行」として精進してきた茶道を女子の道念を練る行として女学校教育に導入し、以後、茶道による女子教育の実践へと進むこととなったのである。この実践から茶道の理念、茶器、作法、手前などに關しても独自の見解が唱えられている。

次に、奥田における茶道実践の特色について述べる。奥田の茶道教育実践について注目すべき点は以下に集約できよう。まず、手前稽古を、最も簡素な所作と道具ででき得る「薄茶平手前」に特化し、更にその精神と身体とが一如となるよう、徹底的に厳しい稽古を実践したという点である。また、茶道具に關しては「珍器に対する欲は同じく物塵の汚れである」と述べ、あり合わせの道具を用いることを徹底して貫いたのである。このような考え方は『南方録』にもみられる「器物も所作も同じき中に、心の働きはひきかへひきかへ」と同様である。器そのものより奥田がもつと価値を置いたのは、『円虚清浄の一心を以つて器となす』これ茶道最上の器である（『茶味』）というように、器物を動かす「心のはたらき」であった。また、幼少より「行」の教育を受けた奥田は、東洋の身体論の影響により、いわゆる身体が最上の茶器であるともなしていたようである。また、清掃は隱徳を積む行であると考えていた奥田は、清掃についても、自ら徹底して率先し、実践していた。茶道の奥義を究めることは、すなわち人間としての奥義を究めることと同義であり、そのためには茶室や露地の清掃もきわめて大切な修行なのである。以上のことから、奥田は教育者であると同時に実践的求道者であったといえよう。

次に、奥田の茶道理念について考察し、奥田が茶道の精神の綱要と捉えた「和敬清寂」の意味を分析していく。「人生万般みなこの四文字で律せられる」と主張する奥田にとって、「和敬清寂」の精神とは茶道と日常生活とをつなぐ鍵であり、茶室での精神・行いと同様に、日常の起居の全てが「和敬清寂」の精神に適ったものでなければならなかった。換言すれば茶室での一定時間のみを限定しての「和敬清寂」のあり方は十全の価値を持たなかつたのである。奥田の著『茶味』のなかで、「稽古の虚位から進んで實主歴然の実位に入り、自らなる和敬清寂が備わらねばならむ」とあるように、茶室での行いは日常生活と不離であつて、茶道の実践は実生活の実践にも移さるべきものと捉えていたことを明らかにする。

最後に「終章」では、これまでの研究をまとめながら、奥田正造の茶道教育論に基づく実践、例えば、今日でも盛んに論議されている少人数級での教育の問題などについて考察を行い、奥田正造の茶道教育論の今日的な意義についても論じる。

## 二、本論文の評価されるべき特色

先ず、本論文の評価されるべき特色を列記してみる。

1. 本論文は奥田正造について、その生い立ち、教育と茶道についての思想、その実践的な活動などを包括的に論じ、奥田正造の全体像を浮かび上がらせた初めての論考として高い価値をもっている。
2. 広い範囲にわたる叙述は、『奥田正造全集』のほか、周到な調査によって集められた多くの資料に裏づけられ、説得力の強いものとなっている。
3. 奥田の思想形成・人格形成が如何に行われてきたかについての研究は、従来の奥田正造研究では看過ないし軽視されてきたが、本論文の第一章「奥田正造の生い立ち―『茶味』の成立とその背景―」において、これが多くの資料を紹介しつつ詳細に論じられた。これは従来の奥田研究に欠落していた部分を補ったものと評価できる。
4. 第三章「奥田正造の教育観」では、奥田の教育観を論じるに当って、広く東西の教育観を見渡し、また胎教論、家庭教育論、女子教育論についても、奥田以外のさまざまな考え方を取り上げつつ論じていく。余りにも広範にわたるが故にやや散漫になるきらい無きにしもあらずであるが、尊敬すべき人を論じるさいに誰しもおち入りがちな無批判的独断論にならず、広い視野から、できるだけ客観的に奥田の教育論を見ようとしたことは高く評価できる。
5. 第四章の「奥田正造の茶道論」は布埜氏の多年にわたる茶道実践に裏付けられた、力ある論考となっている。特に奥田の茶道について「道具を重視していないことから、藝術性に乏しい茶の湯である」とみなされる傾向にある。しかし、明治以降、美を追求する営みの義として使われてきた西洋的な、狭義での藝術 (art) の視点からではなく、元来日本で使われていた、人間の百般の才能を表す意味での東洋的な「藝術」という視点から考えると、人間形成をも含む広義な意味での芸術を目指すダイナミックこそ奥田の茶道教育の醍醐味といえる」と結論づけているのは、まことに正鵠を射たものというべきである。

### 三、審査結果の要旨

以上の如く勝れた特色を持った本論文には、しかしまた不満な点もある。その一つは、大きな視野から奥田の茶道教育を見ようとしたことからくる止むを得ぬ結果ではあるが、既に指摘したように叙述がしばしば散漫にながれている点である。またおびただしい引用文の中には未消化のままのものが混入している場合がある。

このような瑕瑾を含むものの、本論文は叙述の整合性においても、内容の獨創性においても、すぐれ、三名の審査委員の全員の一致をもって、博士（芸術学）の学位を授与するに妥当であるとの結論に達した。